9月5日、東京2020パラリンピックが閉幕しました。今大会には、小野上地区出身の唐澤剣也選手が初出場を果たし、陸上男子5000m(T11)で見事銀メダルを獲得しました。

唐澤選手は、小学4年生の時に病気で視力を失い、小野上小学校から県立盲学校に転校しました。卒業後は県立点字図書館の職員となり、フルタイムで働きながら陸上の練習を重ねてきました。

▶市役所にメダル獲得を祝うポスターを掲示

唐澤選手には、小野上地区の元旦マラソンや市役所などで何度もお会いしましたが、とても真面目で礼儀正しく、親しみやすい人柄です。以前、唐澤選手に「視覚に障害のある人として社会に何を望みますか」と質問すると、即座に「人々の声掛けです」という答えが返ってきました。その答えに、段差解消などのハードよりも、「心のバリアフリー」の方が大切なのだと気付かされました。

今、渋川市は「共生社会実現のまち」を進めています。「多様性と調和」が東京2020大会のコンセプトの1つでした。そして、「失ったものを数えるな。残された機能を最大限に生かそう」というパラリンピックの理念、また、国際パラリンピック委員会のアンドリュー・パーソンズ会長の「違いは強みであって弱みではない」という言葉が、唐澤選手の望む「心のバリアフリー」なのだと改めて思いました。

「全ての違いが輝く街」を目指して、パラリンピックの感動を一過性に終わらせず、「壁」のない社会を実現し、多様性を認め、支え合う共生社会を根付かせていきたいものです。

古を訪ねて 43 緑釉陶器と灰釉陶器

9世紀以降、中国から青磁・白磁などの磁器が輸入され、それをまねた緑釉陶器・灰釉陶器が国内で生産されます。

緑釉陶器は、緑色のうわぐすりをかけた器で、東海地方や京都で作られました。多くは都で消費され、東国では貴重品でした。灰釉陶器は、透明や白っぽいうわぐすりをかけた器で、東海地方で大量生産されました。9世紀後半から11世紀にかけて、東日本一帯の一般集落にも広く流通しました。

内陸交通路の大動脈の1つである東山道が通る大国だった上野国では、これらの陶器が周辺の国々よりも多量に出土しています。

市内でも、灰釉陶器は数多くの遺跡で出土しています。緑釉陶器は真壁向山遺跡や有馬久宮間戸遺跡などで優品が発見されています。

真壁向山遺跡の緑釉陶器(市指定文化財)

渋川市美術館・桑原巨守彫刻美術館(☎25-3215)

美術の小窓

《野の話》
桑原巨守作
1973年
高さ:122cm　素材:ブロンズ

つばが広い帽子を膝の上に裏返し、ウサギを抱きかかえています。新緑が目にも鮮やかな野原か、あるいは、小麦色の秋の風を感じさせる野っ原か。そして、その野原を駆け巡るウサギの姿を想像することができます。現在、常設展示室で公開中です。

●イベントカレンダー

会場	展示内容	期日	観覧料
常設展示室	常設展・後期 桑原巨守彫刻作品	～11月23日(祝)	200円
企画展示室	渋川を愛でる美術展2021	～10月3日(日)	無料
	こどもあーと展2021	10月8日(金)～24日(日)	

■開館時間　午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)
※観覧料は、65歳以上・中学生以下は無料

●10月の休館日　5日(火)、12日(火)、19日(火)、26日(火)